

京都府教育委員会教育長 様

令和8年 3月 12日

ラ ボ 名	国語科表現探究ラボ
代表者所属名	京都府立東宇治高等学校
代表者職・氏名	教諭・鳥本純平

京都府立学校授業力等向上ラボ支援事業報告書

次のとおり報告します。

1 ラボ名

国語科表現探究ラボ

2 研究テーマ

国語科全教科による生徒の主体的な表現につながる「問い」の研究

3 研究の目的

学習指導要領において、国語科で育成を目指す資質・能力を「国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」と規定しているが、それはいったいどのような資質・能力で、どのように身に付けさせるのか。様々な科目の性格も踏まえて、生徒の表現につながる、より良い「問い」について研究する。

4 研究の成果と課題

ラボメンバーそれぞれが、現在担当している科目の中で「表現」に関する研究を行った。各自が表現に結び付く「問い」について考え、中心となる大きな「問い」から授業を逆設計するなど、「問い」を中心に授業を組み立てた。

成果としては、「問い」を中心に授業を組み立てることで、授業者自身が授業の論点を明確にしたうえで授業を行うことができるため、それが生徒への「問い」の精度の向上や指示の明確化につながった。また、生徒自身も様々な形で繰り返し表現活動を行うことで表現への抵抗感が薄れていったように感じる。

課題は、安易にAIを活用する生徒への対応。目的や使用条件について、問いや課題に応じた具体的な指示が必要である。俳句の創作の一環で、AIの作った俳句を添削する

という内容を実践してみると生徒の創作の質の変化を感じた。表現とAIを有効に結びつける実践例もさらに探究の余地がある。

二年間、「表現」を中心テーマとして活動した。より良い表現について考える力は、他者との違いを明確にするには論理的であらねばならないし、詩歌などを創作するには鑑賞力が必要になるなど、複合的な思考が必要となるため、生徒個々が自身の表現について考える力は実社会的である。表現への苦手意識を少しでも取り去り、主体的な表現ができる力を養うことは、生徒個々がよりよく未来を生きる力の育成につながるのではないかと考えている。

5 研究成果の波及方法

「問い」を意識することは、授業力の向上につながる。「問い」やそれに基づいた実践などを集積し、共有することで教員全体での授業力向上につながる。

6 研究（活動）実績*

年月	研究（活動）内容（具体的に記載）	活動場所
令和7年8月7日	顔合わせと研究テーマの確認	京都府庁 (ZOOM併用)
令和7年8月中	・「現代文「脱構築」へのトライアウト授業」視聴 ・「付属語・敬語の知識を活かしての古文解釈」視聴	各自視聴（オンライン）
令和7年12月1日	2学期の活動（授業）評価と意見交換、3学期の活動と意見交換	ZOOM
令和8年3月3日	成果と課題のまとめ	ZOOM

7 予算執行状況

- (1) 旅費・研究会等参加費は、旅費等執行状況報告書に記載のとおり
- (2) 図書については、受領書のとおり

8 他校へ勧めたい実践又は他校へ呼びかけたい共同研究（できるだけ具体的に）

テーマ	「問い」の集積
育てたい資質能力	「問い」やそれに基づいた実践などを集積し、共有することで授業力の向上を目指す。
実践又は研究の 具体的内容	